

# 「幸福度指標」に見る人口減少社会の未来の扉

## ～小国町「住民アンケート」から～ 第1回（3回シリーズ）

### <趣旨>

地域企業の経営は、これまでに無い大きな節目を迎えている。

自然災害、地球環境、世界的感染症、高齢化・人口減少社会、高度情報化社会、等などの急展開である。

これらの不可逆的環境変化に対して、事業を継続し、発展させるには、従来の経済合理性の追求強化に加えて、‘何か’が、必要である。

その‘何か’は、これまで積み重ねて来た経験や勘からは、見えてこない。

当研究所は、経済・社会・環境問題を一体とし、‘誰一人取り残さない’という包摂的理念を掲げ、2015年に国連で採択されたSDGs<sup>エスディージーズ</sup>（持続可能な開発目標：Sustainable Development Goals）と、2011年からOECD（経済協力開発機構）が提唱している「幸福の枠組み」から、その‘何か’を探り出そうと挑戦している。

最初の挑戦である、本年1月に実施した小国町との共同調査・研究「住民アンケート」幸福度調査において、その手がかりをつかむことができた。

今月号より、3回シリーズでお届けする。

第1回（本号）：1970年に、総務省から‘過疎地域’の指定を受けた人口約7,000人の小国町。

人口減少に歯止めがかからない寂しさを感じながらも、そこに生活する方々の幸福度の高さと、その内容を紹介する。

第2回（5月）：町内6つの集落の幸福度を、比較する。

最も幸福度の高い「西里」は、2009年に小学校が廃校になった人口400人の、第三者から見れば、‘限界集落’。

第3回（6月）：その背景を、住民アンケートから整理し、潜在する新しい世界を開示する。

経済合理性の追求では、この事実は見えてこない。‘過疎地域’‘限界集落’が、人口減少社会の未来の扉を開く世界である。

そこに、新たなビジネスの可能性（コロンブスの卵）を見出した。

※今月号より、3回シリーズで掲載を予定する本レポートは、2020年3月にOECD東京センターに提出した報告書の要約版です。

報告書本文にご関心のある方は、当研究所にご連絡ください。贈呈いたします。

## 「住民アンケート」幸福度調査について

- 本調査は、小国町の第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」策定等に活かす目的として行った小国町と当研究所との共同調査・研究である。
- 質問票設計にあたっては、「OECD幸福の枠組み（10項目）」に対し、熊本県独自の指標である「県民総幸福量（AKH）※1」の考え方を参考にした。
- 分析手法及び仮説設定等について、九州大学 主幹教授 都市研究センター長 馬奈木 俊介 先生にご指導と監修を頂いた。

※1 県民総幸福量（AKH）～県民アンケート（「県民の幸福に関する意識調査」）に基づき算出された県民幸福量を測る総合指標（AKH：Aggregate Kumamoto Happiness）

### 質問票（一部抜粋）

#### 1. 収入や資産（預貯金やローン、不動産の保有など）について

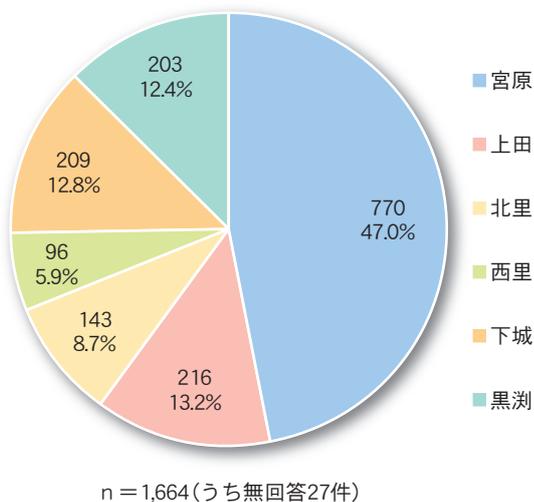
あなたのお宅では、現在、ご家族を含めて、生活に必要な収入や資産を得ていると、感じていますか？



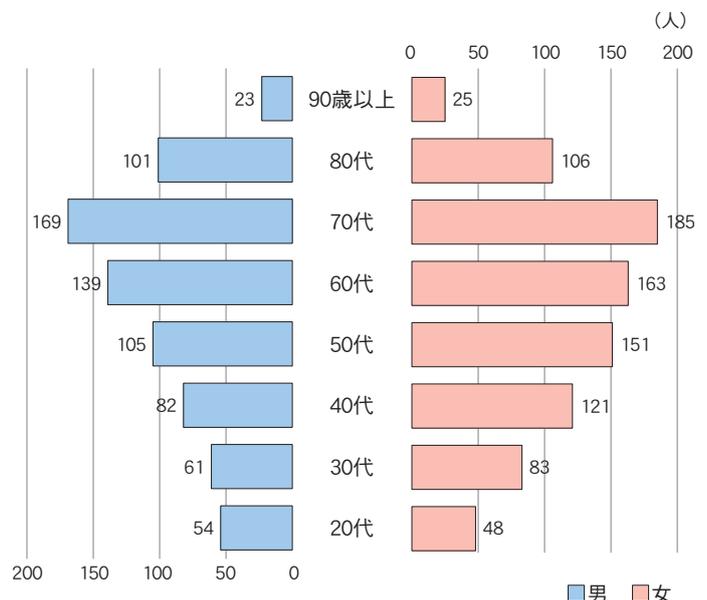
## 調査概要

- 調査対象 町内20歳以上人口6,067人の内、4,000名を対象に郵送調査。  
(小国町住民基本台帳：2019年12月1日時点)
- 有効回答数 1,664先（回答率41.6%）      ➤ 調査期間 2020年1月14日～1月31日

図表1 居住地区



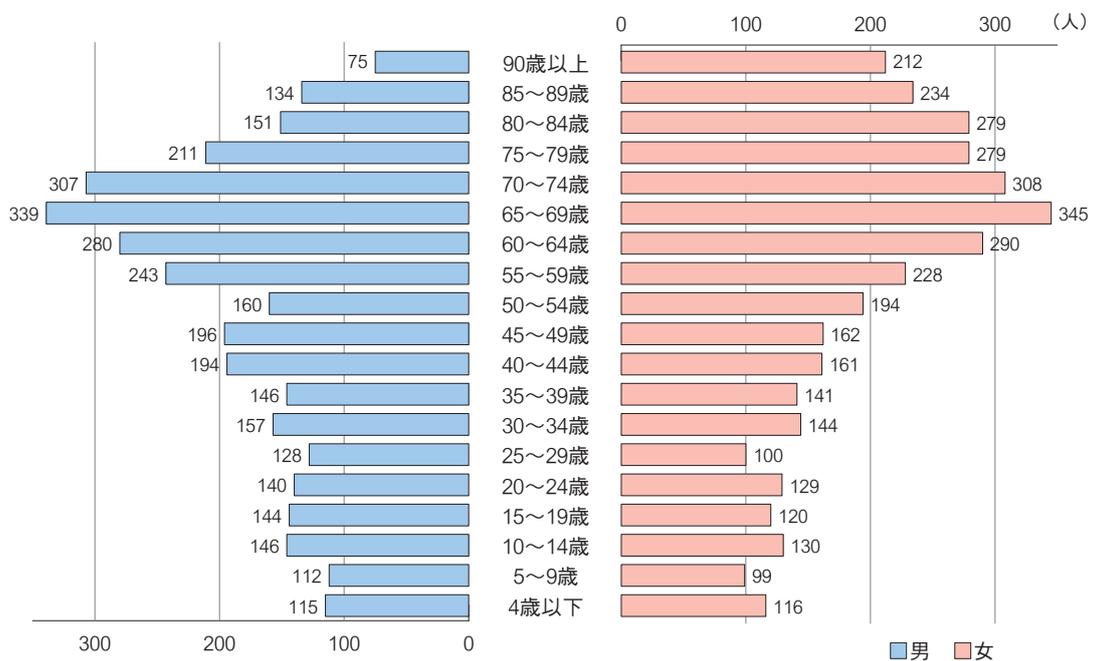
図表2 性別・年代別



## 1 過疎地域の新規在住者

- 小国町の総人口は、7,049人（第2期小国町人口ビジョン～小国町住民台帳2019年12月～）。
- 人口ピラミッドは逆三角形に近づき、総務省から‘過疎地域’に指定されている。それでは、人口減少一辺倒かという点、今回の住民アンケートから見えてきた事実は、少し違う。  
毎年、約100人の一定かつ安定した‘新規在住者’が居る。

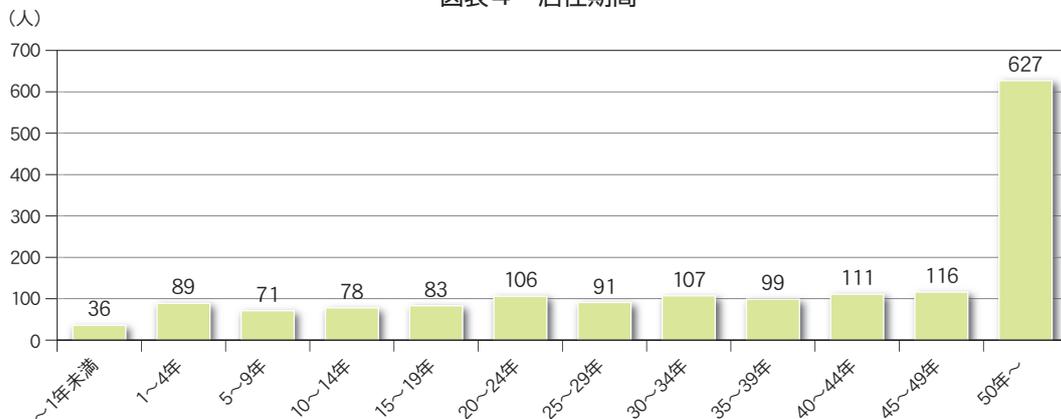
図表3 小国町の人口ピラミッド



資料：第2期小国町人口ビジョン

- 小国町の人口ピラミッドは65～69才を最大値に持つ少子高齢化の典型的な構造を持つ。

図表4 居住期間



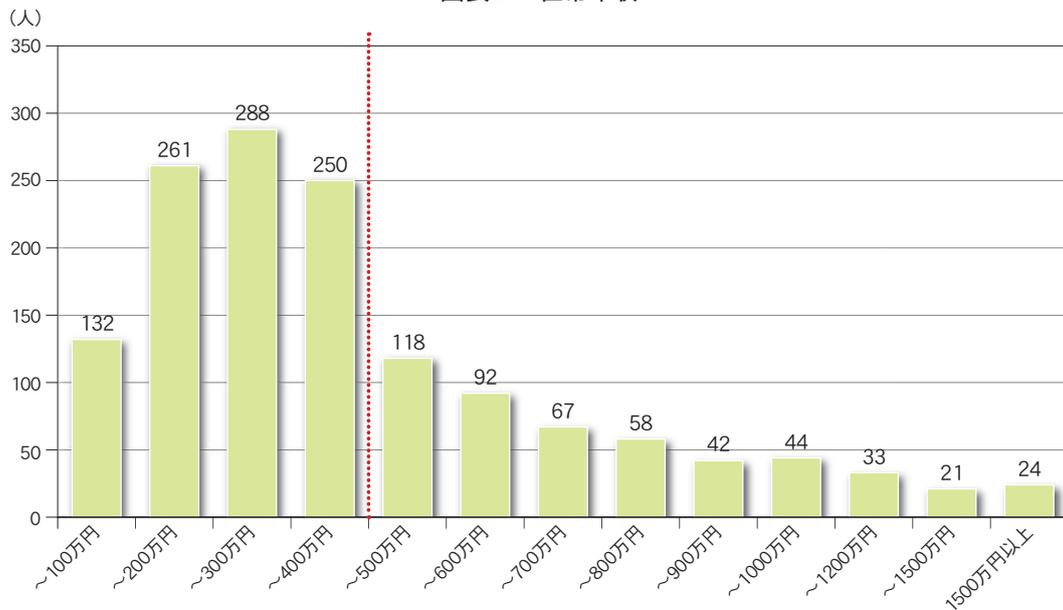
資料：小国町「住民アンケート」以下同

- アンケートの回答数は、人口のほぼ1/4であるので居住期間0～4年を4倍すれば、500人。1年では100人となり、新規在住者は年間100人となる。

## 2 世帯年収に対する満足度

- 世帯年収400万円以下が、全体の半分以上を占める。
- それに対し、「現在の収入」や、「仕事のやりがい」に対する満足度は、高い。

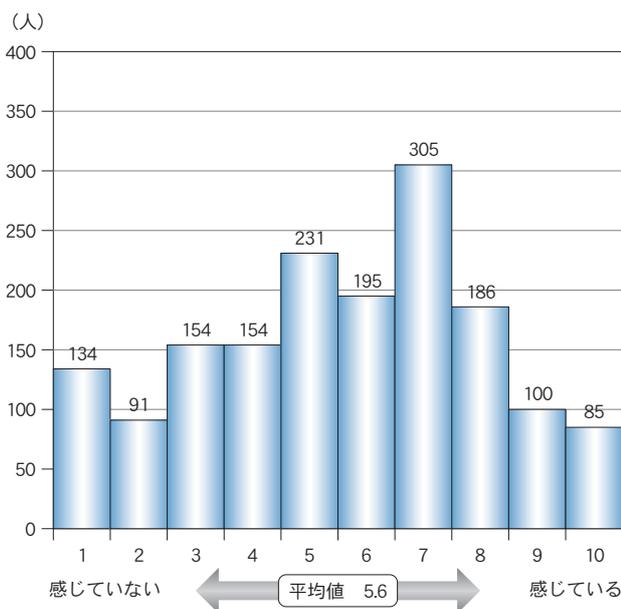
図表5 世帯年収



- アンケート回答者のうち、世帯年収が400万以下の割合は、65.1%となる。

図表6 現在の収入に対する満足度

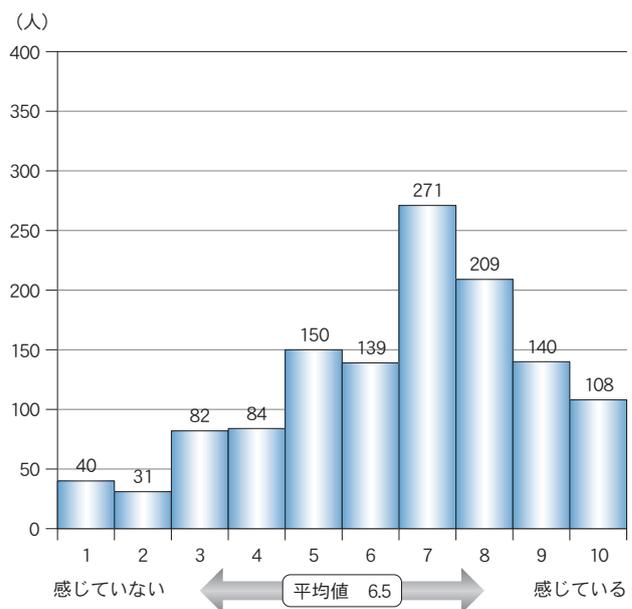
Q. あなたは生活に必要な収入や資産を得ていると感じますか？



- 「平均値5.6」は、10段階評価の丁度中心。

図表7 仕事のやりがい

Q. あなたは現在の仕事に「やりがい」を感じていますか？

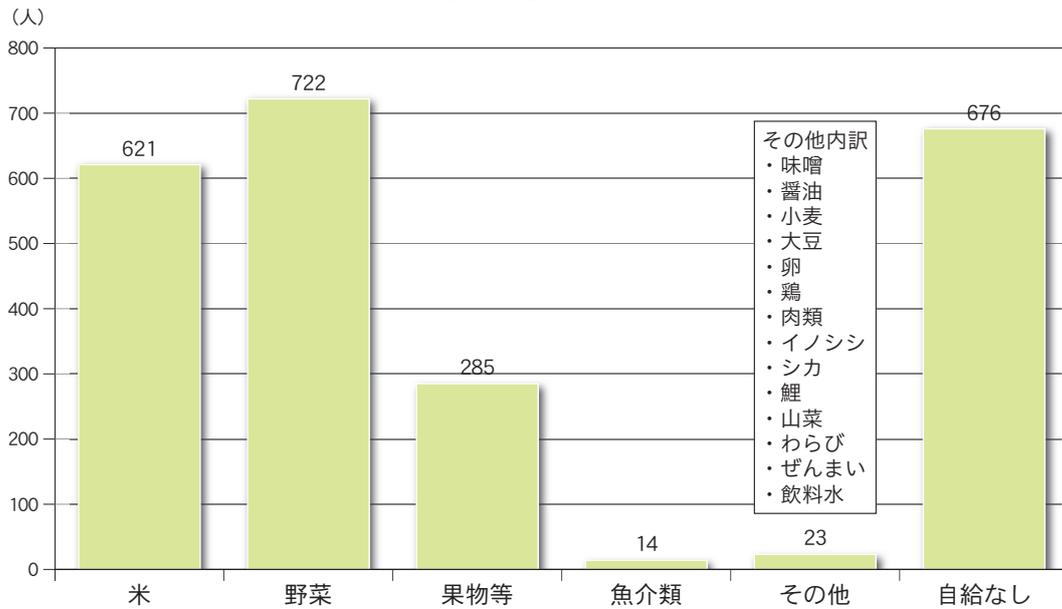


- 仕事の「やりがい」に対する評価は、極めて高い。

### 3 食料自給の状況と住まいの満足

- 自らの耕作に加え、自生する食料にも恵まれている。
- 住まいに対する満足度も、高い。

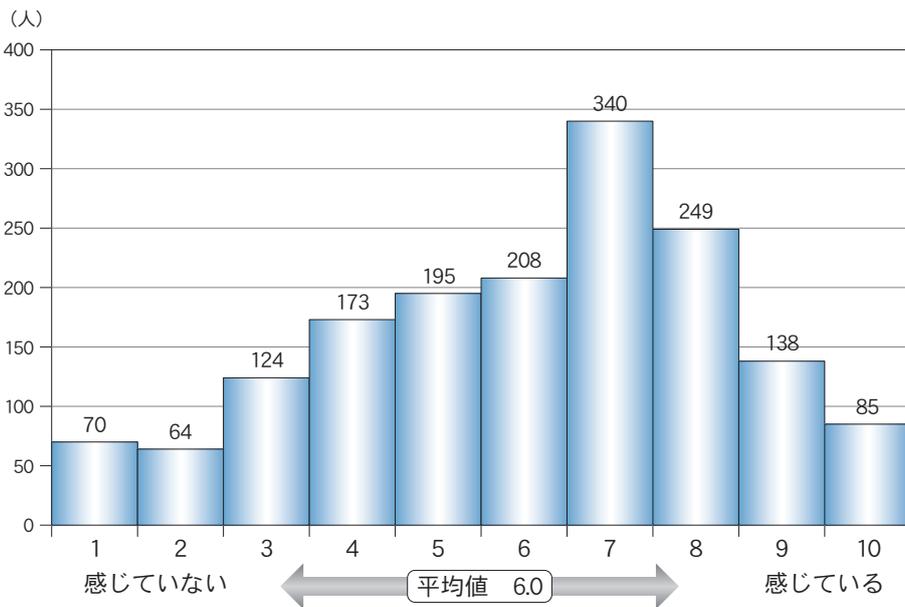
図表8 食料の自給



- 豊かな自然を背景として、幅広い農作物が自給されており、恵みを楽しんでいる。

図表9 住まいの快適さ

Q. あなたは、現在のお住まいに「快適さ」や「ゆとり」を感じていますか？



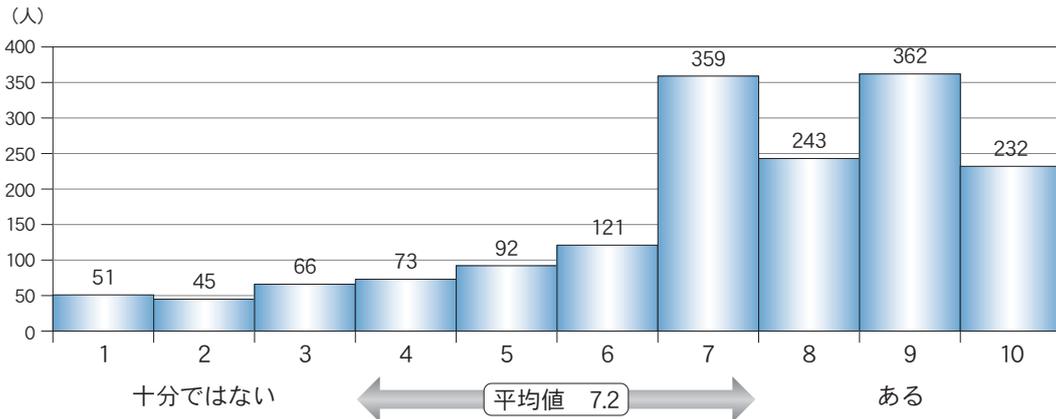
- 住まいへの「快適さ」や「ゆとり」に対する評価は高い。

## 4 地域の相互サポートと地元への愛情

➤ 生活の豊かさはGDPだけでは測れず、幸福の根本は、地域との関係性の中で、「信頼」にあることに気づかされる。

図表10 相互扶助と互恵

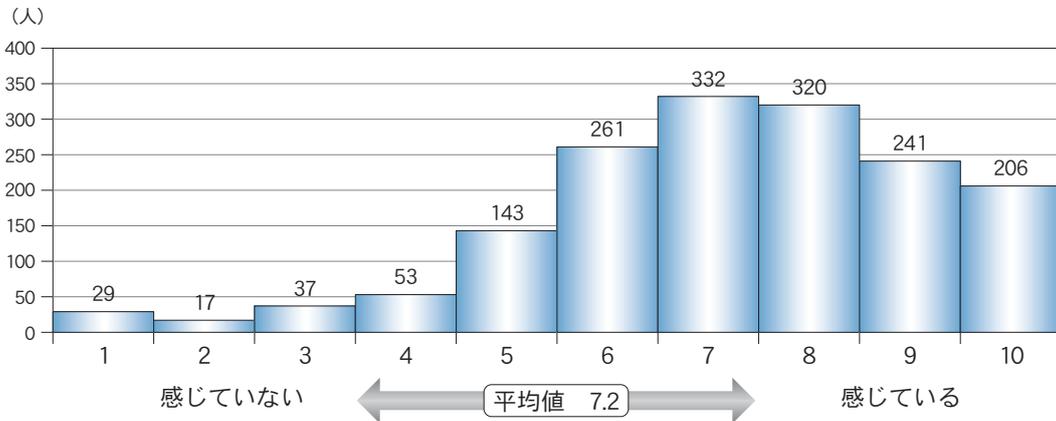
Q. あなたのご近所、あるいは地域では、何かあった時お互いに声を掛け合ったり、お手伝いしたりする習慣はありますか？



• 地域での結び付きが強く信頼を得ている。

図表11 地元の歴史と文化

Q. あなたは、地元の歴史や文化に誇りを感じていますか？



• 地元への愛着が強く、住み慣れた地区が築き上げたものが求心力を持っている。

### <最後に>

- ‘人口減少社会’ ‘過疎地域’ ‘限界集落’ の言葉には、ネガティブなイメージがある。
- そこからは、「将来、無くなる地域に税金を使うのは無駄だ。」という考え方が生まれ、説得力のある合理性を感じる。
- しかし、まずは価値判断を入れない、ニュートラルな事実認識が重要ではないか？ 次回以降、5月・6月号で、この点を掘り下げる。

📌 ‘過疎地域’ に潜在する、全く新しい市場の創造にまで、つなげたい。